

神話と創作 ——逆流と抱擁をめぐる——

大塚 秀 高*

呉越の地には、銭塘江などの杭州湾に注ぐ江に起こる逆流現象を反映し、潮神神話が次々に生まれた。白話小説で言及される潮神としては、戦国時代の伍子胥、唐の石瑰、宋の馮俊、（宋または）元の晏公などがある。石瑰以下の潮神にまつわる物語は、伍子胥の物語が下敷きとなって創作された。「楽小舎拵生覓偶」、「楊八老越国奇逢」、「譚楚玉戯里伝情 劉藐姑曲終死節」がそれである。銭塘江はかつて長江と呼ばれていた。このため長江（揚子江）にも潮神神話が移植され、屍が江を遡る鼈霊の神話と融合し、「張廷秀逃生救父」が生まれた。

「楊八老越国奇逢」で馮俊が祀られるとされる曹娥江には、逆流に吞まれて死んだ父の遺体を抱きかかえ、屍となって浮上する曹娥の伝承があった。曹娥故事の没水獲翁譚は叔先雄故事を取り込んだものであるが、これを南宋臨安の玩潮（弄潮）のおりに逆流に攫われた娘とその幼馴染と変え、潮神の粋なはからいで抱き合って生きたまま浮上するとした作品が「楽小舎拵生覓偶」であり、それをさらにひとひねりし、救助も間に合わないほどの激流に流されるとした作品が李漁の「譚楚玉戯里伝情 劉藐姑曲終死節」であった。

李漁には、面識があったか否かは不明だが、多大な影響を受けた小説作者のグループがあった。それが、上述の潮神が登場する「三言」所収の作品群の作者たちである。明末清初の小説創作は、こうした競争的雰囲気の中で行われていたのである。

キーワード：伍子胥、鼈霊、潮神、逆流、抱、曹娥、叔先雄、没水獲翁譚、李漁。

一 逆流の神話

——「張廷秀逃生救父」と伍子胥

馮夢龍が編輯したとされる三言には、杭州とその周辺を舞台とした作品が多数含まれている。以下では『醒世恒言』巻20「張廷秀逃生救父」と『警世通言』巻23「楽小舎拵生覓偶」とを中心に、そこに見える神話の影の揺曳とそこに加えられた新たな創作につき論じてみたい。

『醒世恒言』巻20「張廷秀逃生救父」の舞台

は蘇州である。杭州でなく蘇州を舞台とする作品を冒頭に取り上げるわけについては徐々に明らかにしてゆくことにして、まずはそのあらすじを記そう。ちなみに、この話は三言のなかで二番目に長い作品で、入話はない。

明の万暦年間のこと、蘇州の家具職人張権の長子廷秀は、蘇州専諸巷で玉器舗を営む王員外の次女の玉姐の婿養子に迎えらるることになった。これを知った長女瑞姐とその夫の趙昂は、王家の巨富を独占しようと謀略をめぐらし、胥吏の楊洪を買収し、張権が強盗の一味であると誣告・逮捕させた。さらに王家の使用人を買収

* おおつか・ひでたか
埼玉大学教養学部教授、中国文学

し、廷秀が放蕩していると言わせ、員外に廷秀を追い出させた。廷秀が弟の文秀と鎮江に巡ってきた提刑按察使に父の無実を訴えに行くと、楊洪を使って二人を長江に沈めさせた。しかし、二人は奇跡的に助かり、廷秀は孫尚書の劇団の役者に、文秀は布商人の褚衛に救われ養子となった。廷秀はのち礼部主事邵承恩の養子に迎えられる。その後、二人は同時に科挙に及第し、廷秀は常州府推官を、文秀は庶吉士を授けられた。二人は蘇州にもどり、張権を釈放、楊洪を捕えて事件の全貌を明らかにした。趙昂・楊洪らは斬に処された。この間、数年にわたって節を守り通した玉姐は廷秀と結ばれ、三子をもうけた。次子が王家を、三子が邵家を継いだ。

ここで問題としたいのは、趙昂が楊洪を使って二人を長江に沈めさせた次の場面である。打ち合わせにしたがい蘇州の閶門で待ちうけた楊洪は、二人を乗せた船をわざわざ夜に鎮江に着かせ、親切ごかしに船で夜を過ごすよう勧める。その晩、楊洪は二人に酒を飲ませて人事不省にさせようと、船を長江の真ん中に漕ぎ出させる。

過了焦山，到一寬闊處，取出索子，將他弟兄捆綁起來，恰好兩只餛飩相似。二子身上疼痛，從醉夢中驚醒，掙紮不動。却待喊叫，被楊洪、楊江扛起，向江中扑通的攆將下去。……

你想長江中是何等樣水。那水從四川、湖広、江西一路上流衝將下來，渾如滾湯一般緊急，到了鎮江，直溜入海，就是落下一塊砂石，少不得隨流而下。偏有廷秀弟兄，撇入江中，却反逆流上去。楊洪、楊江望見，也道奇怪。撥轉船頭趕上，各提起篙子，照着頭上便射。說時遲那時快，篙子離身不上一尺，早被三四個大浪，把二子直涌開去，連船險些兒掀翻。那篙子便不能傷。楊江料

道必無活里，原移至沿口泊下。

餛飩のように捆绑され長江に投げ込まれた二人は、おりよく起こった「三四個大浪」により、危うく死地を逃れる。しかも、すぐ近くの「沙洲蘆葦之旁」に打ち上げられた廷秀はよいとして、文秀の方は鎮江から「三十余里」も長江を遡上し、川面に浮かんでいるところを褚衛という子のない夫婦の船に救助されたとされる。褚衛は次のように考え、文秀を養子にした。

褚衛本是好善之人，見他說得苦楚，心下十分可憐。初時到有送他回去之念，忽地想起鎮江到此乃是逆水，怎麼反淌了上來？莫非此子後來有些好處，暗中自有鬼神護佑麼？我今尚無子嗣，何不留他回去，做個螟蛉之子，却不是好。

おわかりのように、「張廷秀逃生救父」には、江南に関わる二つの神話の影が揺曳している。ひとつは伍子胥に関するもの、いまひとつは蠶靈に関するものである。以下では、まず伍子胥について述べたい。

呉王寿夢には四人の子があり、順に諸樊、余祭、余昧、季札といった。寿夢は季札の賢いことを知り、これに位を譲ろうとした。しかし、季札は受けない。それで兄弟順に季札に王位がゆくよう命じたのち、諸樊に位を譲った。かくして王位は諸樊から余祭、余祭から余昧へと移ったが、余昧の死後も季札は王位に即こうとしなかった。それで余昧の子の州于が即位した。これが僚である。こうなるとおさまらないのが諸樊の子の光であった。季札が王位に即かないなら寿夢の長子諸樊の子である自分が王位に即いて当然と考え、ひそかに賢人を求めた。それが伍員、字子胥であった。伍子胥は楚の平王に父の奢と兄の尚を殺され、苦勞をかさねて呉に

亡命して来たばかりであった。伍子胥は公子光に專諸を推薦し、光は專諸に僚を暗殺させる。公子光は王位に即き、闔廬と名乗った。闔廬の宰相となった伍子胥は、さっそく軍勢を起こし、楚を討って都を攻め落とし、すでに死んでいた平王の墓を暴いて屍を鞭打った。かくして伍子胥は父と兄の敵を討ったのである。

その後、呉の国では太子が早死し、その子の夫差が跡を継いで太子となった。これに決定的な役割を果たしたのが伍子胥であったが、即位した夫差は次第に伍子胥を疎んずるようになった。夫差は越王の賂を受けた太宰の嚮を信用し、越への警戒をないがしろにする。これをいさめた伍子胥は夫差の不興をかい、自尽を命ぜられる。伍子胥が怨みの言葉を述べつつ死んだことを知った夫差は、「取子胥尸，盛以鴟夷之器……乃棄其軀，投之江中」したという。「鴟夷之器」というのは馬の皮で作った袋であるという。すると「子胥因随流揚波，依潮来往，蕩激崩岸」したというから、逆巻く潮流にのって江を上下し、岸を突き崩したというのである（引用は後漢・趙曄の『呉越春秋』巻5「夫差内伝」による）。

呉の都は蘇州だが、伍子胥の屍が投げ込まれた江はいずれこの江なのであろうか。『呉越春秋』などの記述によるなら、逆流の起きる江でなければならぬ。したがって、常識的には後述する「楽小舎拵生覓偶」の舞台となっている錢塘江、ないしはそれと同じく杭州湾に注ぎ込むいずれかの江ではないかとなる。「楽小舎拵生覓偶」の以下に引く入話によれば、錢塘江が錢塘江と呼ばれるようになったのは後世のことであるから、その屍が投げ込まれた江が錢塘江であった可能性はみとめられる。

後因黄巢作乱，錢鏐破賊有功，僖宗拜

為節度使。後遇董昌作乱，錢鏐收討平定，昭宗封為吳越国王。因杭州建都，治得國中寧靜。只是地方狹窄，更兼長江汹涌，心常不悅。忽一日，有司進到金色鯉魚一尾，約長三尺有余，兩目炯炯有光，将来做御膳。錢王見此魚壯健，不忍殺之，令畜之池中。夜夢一老人來見，峨冠博帶，口稱：小聖夜來，孺子不肖，乘酒醉，變作金色鯉魚，游于江岸，被人獲之，進与大王作御膳，謝大王不殺之恩。今者小聖，特來哀告大王，願王憐憫，差人送往江中，必當重報。錢王允，龍君乃退。錢王颯然驚覺得一夢。次早昇殿，喚左右打起那魚，差人放之江中。当夜，又夢龍君謝曰：感大王再生之恩，將何以報？小聖龍宮海藏，应有奇珍異宝，夜光珠，盈尺璧，任從大王所欲，即当奉獻。錢王乃言：珍宝珠（珍）璧（璧），非吾願（好）也。惟我國僻处海隅，地方無千里。况（更）兼長江広闊，波涛汹涌，日夕相衝，使国人常有風波之患。汝能借地一方，以広吾国，是所願也。……後方始稱為錢塘江。

だが、錢塘江が長江と呼ばれていた時期があったなら、錢塘江ならぬ長江（揚子江）こそが伍子胥の投げ込まれた江であるとされても不思議はあるまい。上記の「楽小舎拵生覓偶」の引用に、金色の鯉魚に化していたため人間に捕らえられた息子の命乞いに、龍王が錢鏐の夢枕に立つ話が見えるが、同様の筋書を持ったより有名な話は『西遊記』の三蔵法師の出世譚、いわゆる「江流和尚」部分であろう。三蔵法師は長江を「順水流下，一直流到金山寺脚下停住」とされる。金山は鎮江近辺の長江中にあり、その直下の水中には龍宮があるとされていたし、「江流和尚」と同内容の民間故事「三官老爺的故事」¹にあつては、陳光蕊の息子は洵僧と呼ばれていた。したがって、事実として伍子胥がい

ずこの江に投げ込まれたかは別として、「張廷秀逃生救父」の作者の脳裏にあっては長江（揚子江）であったことに、まず間違いはなさそうである。事実、江をいずこの江に比定するかをめぐる諸説の中に、それを丹徒大江とするものもあった。丹徒はすなわち鎮江である。さすれば、兄弟二人を助けた大浪は伍子胥が起こしたものと設定されていたに相違ない。だが、王充の『論衡』は長江（揚子江）には濤が立たないとしている。以下に黄斐默の『集説詮真』により『論衡』を引こう。

漢王充著《論衡・書虚篇》曰：伝書言吳王夫差殺伍子胥，煮之于鑊，乃以鴟夷橐投之于江，子胥恚恨，驅水為濤，以溺殺人。今時会稽丹徒大江（按《地理韻編》：丹徒漢県，属会稽郡，今江蘇鎮江府丹徒県西十八里。大江即揚子江。），錢唐浙江（按《地理韻編》：錢唐漢県，属会稽郡，今浙江杭州府錢塘県西。按《明一統志》：浙江在浙江杭州府城西三里。出源安徽徽州府歙県玉山。曲折而東，以入海。即錢塘江也。），皆立子胥之廟也。屈原懷恨，自投湘江（……按《広輿記》：屈原五月五日自投湖南長沙府湘陰県汨羅江。）。湘江不為濤。……且投于江中，何江也？有丹徒大江，有錢唐浙江，有吳通凌江。或言投于丹徒大江，無濤。欲言投于錢唐浙江，浙江、山陰江、上虞江（山陰、上虞俱属浙江紹興府。）皆有濤。三江有濤，豈分橐中之体，散置三江中乎？

案ずるに、長江（揚子江）には濤が立たないと思われていたことこそが、「到了鎮江，直溜入海，就是落下一塊砂石，少不得隨流而下」と、事実に反し、鎮江と海の近さを強調するゆえんなのであろう。だが、錢塘江の逆流のように衆目の集まる場所とはならなかったが、長江（揚

子江）の沿岸地域にも逆流現象や潮災は発生しており、太湖から流れ出し、上海で黄浦江と合流する吳淞江は、8世紀から13世紀においては最も顕著にその影響を受けたという²。しかれば、伍子胥の投げ込まれた江が吳淞江であった可能性もまた否定できまい。

二 逆流の神話

——「張廷秀逃生救父」と鼃靈

閑話休題。後日、廷秀・文秀の兄弟は榮達して蘇州にもどることになるが、その際にくぐる門は胥門であった。胥門は、伍子胥の死後、会稽の恥を濯がんと吳王夫差に戦いを挑んで蘇州城間近に逼った越王勾踐の軍前に子胥の巨大な首が出現した門であったし、胥門の胥そのものが伍子胥を連想させた。「張廷秀逃生救父」には地名として專諸巷や胥門が登場するが、それは作者がそのことにより、読者にこの作品を解説するためのコードが伍子胥の神話であることを示したものであると思われる。この作品は、父と兄が殺され、自身も自尽を余儀なくされて悲劇に終わる伍子胥の神話を念頭に、そのアンチテーゼとして創作されたものであったろう。それゆえに兄弟二人はともに榮達しなければならず、父も獄中で安穩に暮らし無事救出されねばならなかったのである。ちなみに、廷秀・文秀が江に投げ込まれた時の様子は、伍子胥の「鴟夷之器」をイメージしたものだったに相違ない。

伍子胥の神話とともに「張廷秀逃生救父」を支えている神話は鼃靈の神話である。鼃靈の神話としては『全上古三代秦漢三國六朝文』『全漢文』巻53に見える揚雄の『蜀王本紀』を引いておきたい。

望帝積百余歳，荊有一人名鼃靈，其尸亡去，荊人求之不得，鼃靈尸随江水上至

郫，遂活，与望帝相見。望帝以鼈靈為相。時玉山出水，若堯之洪水，望帝不能治，使鼈靈決玉山，民得安处。鼈靈治水去後，望帝与其妻通，慙媿，自以德薄，不如鼈靈，乃委国授之而去，如堯之禪舜。鼈靈即位，号曰開明帝。

中国の神話は、その広大さを反映し、いくつかの系統に分かれている。黄河流域の文明を背景にした神話はつとに知られ研究されてきたが、考古学の興隆とともに、長江流域にも古い文明が存在しており、それを背景とする別系統の神話が存在することが明らかとなり、それにスポット・ライトが当たるようになった。そのひとつが鼈靈の神話である。鼈靈は長江の上流部四川盆地、蜀を舞台とする神話に登場する。蜀には後継の絶えた蚕叢、柏濩、魚鳧と続く蜀王三代と、その後に出現した杜宇、後の望帝、ならびにこれを継いだ鼈靈がいたことになっている。鼈靈はもと荊の人だというから、伍子胥と同じく楚の国の人であった。その屍がなぜか長江を遡って郫までゆき、そこで蘇って望帝の宰相となり、治水で功績をあげて位を譲られたというのがそのおおよそである。郫は蜀の都の成都に近く、二十年ほど前に発見された、異様に飛び出た目をした仮面で有名な三星堆遺跡にも近い。ちなみに、この仮面は蚕叢ではないかとの説がある。荊から郫までといえ、三峡を遡ったことになる。しからば、文秀に鼈靈のイメージが重ねられていることは明らかである。褚衡の脳裏にも鼈靈のことが思い浮かんだ可能性はある。つまり、伍子胥は鼈靈の後裔であり、文秀はそのまた後裔だったのである。してみれば、本来「張廷秀逃生救父」の主人公は廷秀あるいは廷秀・文秀の兄弟ではなく、弟の文秀ひとりだったかも知れない。ところが、後にその構想が変わり、『荊釵記』に関わる趣向が組み込まれるこ

とになって、もうひとり主人公が必要となった結果、廷秀が加えられ、かえってこの作品のメイン・キャラクターとなったのではないか。以上のように考える時、「張廷秀逃生救父」が逆流の起こる錢塘江に代表される杭州湾に注ぐ河川でなく長江を舞台とした理由が明らかになってこよう。読者に鼈靈を意識させるためにはどうしても長江でなければならなかったのである。ちなみに、鼈靈は後に開明帝と名乗り、これ以後蜀は黄河流域の文明と交通が生じたことになっている。

三 潮神の神話——英烈王と平浪侯

『文献通考・郊社考』巻23によれば、杭州の呉山廟に祀られる潮神（涛神とする文献もあるが、以後引用以外は潮神で統一する）伍子胥は、宋・真宗の大中祥符五年に英烈王に封ぜられたという。ところが、英烈王に封ぜられた潮神は伍子胥ひとりに限らなかったようだ。『古今小説』巻18「楊八老越国奇逢」に次のような記載があるからである。

話分兩頭。却說清水閘上有順濟廟，其神姓馮名俊，錢塘人氏。年十六歲時，夢見玉帝遣天神伝命割開其腹，換去五臟六腑，醒來猶覺腹痛。從幼失學，未曾知書，自此忽然開悟，無書不曉，下筆成文，又能預知將來禍福之事。忽一日，臥于家中，叫喚不起，良久方醒。自言適在東海龍王處赴宴，被他勸酒過醉。家人不信，及嘔吐出來都是海錯異味，目所未睹，方知真實。到三十六歲，忽對人說：玉帝命我為江涛之神，三日後，必當赴任。至期無疾而終。是日，江中波涛大作，行舟將覆，忽見朱幡蓋白，白馬紅纓，簇擁一神，現形雲端間，口中叱咤之聲，俄頃波恬浪息。問之土人，其形貌乃馮

俊也。于是就其所居，立廟祠之，賜名順濟廟。紹定年間，累封英烈王之号，其神大有靈応。

順濟廟があったとされる清水閘は、浙江上虞県にある。しからば順濟廟は杭州湾に注ぐ曹娥江、一名上虞江に臨んでいたと考えられる。上虞江は、先の『論衡』によれば、錢塘浙江、つまり錢塘江と同様に「有涛」、すなわち逆流が起る江であった。このことは、馮俊こそは伍子胥の上虞バージョンであり、その分身であったことを示している。

杭州湾に注ぐ錢塘江には、かなり上流の、その地点まで逆流が及んだとは考えにくい埠にまで潮神が祀られていたようだ。以下に引く、李漁の『無声戲合集』巻1「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」にその例が見える。ただし、その潮神は伍子胥でも馮俊でもなく、晏公といい、英烈王ならぬ平浪侯に封ぜられていた。英烈王の下僚という位置づけであろうか。晏公は名を戊仔といい、江西臨江府清江鎮の人で、平浪侯には明の洪武初に封ぜられたという³。

一日做戲做到一個地方，地名叫做□□埠。這地方有所古廟，叫做晏公廟。晏公所職掌的，是江海波濤之事。当初曾封為平浪侯，威靈極其顯赫。他的廟宇就起在水邊，每年十月初三日是他的聖誕。到這時候，那些附近的檀越，都要搬演戲文，替他上這一刻時辰的機會，怎肯当面錯過？神廟之中，不便做私情勾当，也只好叙叙衷曲而已。說了一会，就跪在晏公面前，双双發誓說：譚楚玉斷不他婚，劉藐姑必不另嫁，倘若父母不容，當繼之以死，決不作負義忘情、半途而廢之事。有背盟者，神靈殛之。

この晏公廟の所在地はなぜか記載されていない

ののだが⁴、ヒロイン劉藐姑が浙江衢州府西安県楊村塢の出身とされること、劉藐姑が旦を務める一座は毎年その周辺の同一地域を廻って興行していたこと、後述する二人が網から引き上げられた地点が嚴州府桐廬県新城港口とされることなどから、衢江または富春江に面したいずれかの集落を念頭に置いていたとみられる。錢塘江は遡ると桐廬県の面する富春江となり、なお遡ると衢州府すなわち衢県に面する衢江になった。

四 抱擁の物語

——「譚楚玉戲里伝情

劉藐姑曲終死節」の場合

ここで先に一部を引用した「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」のあらすじを紹介したい。

浙江衢州府西安県に楊村塢という、村民全員が役者稼業にかかわる村があった。とりわけ女の主役である旦に優れていたが、しがない役者稼業でしかも女優とくれば、時には辛い務めをはたさねばならない時もあり、劉藐姑の母劉絳仙の代まではそうして世の中を渡ってきていた。藐姑が十二、三の頃、旧家の子弟の譚楚玉がその美貌にぞっこんとなり、藐姑の気を引こうと楽屋に入り浸る。だが、藐姑の両親の監視が厳しく、客として楽屋に出入りすることに限界を感じた譚楚玉は、浄役が不足していると聞き、役者の世界に身を投ずることにした。こうすれば藐姑に近づけると考えての仕儀であった。ところが、藐姑の両親は娘を高く売るつもりだったから、監視は一座の者にも厳しく、譚楚玉にしてみれば当て外れで、舞台上で目に物をいわせるくらいが関の山であった。そこで、人のいない時を見計らい、芝居のセリフをまねて思いのたけを伝えてみた。すると藐姑から性格俳優の浄から立ち役の生に替わるよう、芝居のセリフにことよせて示唆される。藐姑は旦だったから、

譚楚玉が浄から生にかわれば、それだけ旦との絡みが増えるのは必定であった。かくて譚楚玉は生に転ずる。二人の気持ちはますます高まり、相手以外は娶らないし嫁にもゆかないと、興行先の晏公庙で誓うまでになった。ここまでの上記の引用に先立つ部分である。

ところが、「好事魔多し」の喩えどおり、ここに一大事が出来る。芝居の勧進もとの富翁が藐姑の美貌に目をつけ、昔馴染みの絳仙に娘を妾にするよう求める。絳仙はとりあえず来年の興行のおりにと返事をするが、あっという間に一年がたち、また富翁の村で興行する時節になった。富翁の再度の求めをうけ、これに応ずる覚悟を決めた絳仙は、藐姑にその旨を告げる。藐姑は、自分は譚楚玉という夫のある身だと拒否するが、一笑に附されてしまう。かくて楽日になると、藐姑は譚楚玉に「あなたがいつも演じているのは仮の生だが、今日は真の生を演じて欲しい」といい、富翁の見ている前でいつに変わらぬ様子が舞台上上がり、これが自分の最後の舞台なのだから自分で演じる演目を決めると『荊釵記』を指定する。初めは藐姑の気持ちかわからなかった譚楚玉だったが、錢玉蓮が江に身を投げる場面に到り、孫汝権を罵る本来ないセリフをかの富翁にあびせかけ、「私の王十朋の夫よ。妻が他人に虐げられ江に身を投げて死のうというのに、まさか一人だけ生きていようというわけではありますまいね」といいつつ、舞台が面する江に石を抱えて飛び込む姿を見て、遅れじと大溪に身を投ずる。ここまでのこの小説の前半である。次にそのクライマックス部分を引こう。

那座神廟，原是对着大溪的戲台，就搭在廟門之外。後半截還在岸上，前半截竟在水里。藐姑抱了石塊，也不向左，也不向右，正正的对着台前，唱完了曲子，就狠命一

跳，恰好跳在水中。果然合着前言，做出一本真戲。把那滿場的人，幾乎嚇死。就一齊吶喊起來，教人撈救。誰想一個不曾救得起，又有一個跳下去，与他湊对成双。這是什麼原故？只因藐姑臨跳的時節，忽然掉轉頭來，对着戲房里面道：我那王十朋的夫啊，你妻子被人凌逼不過，要投水死了，你難道好独自一個活在世上不成？譚楚玉坐在戲箱上面，聽見這一句，就慌忙走上台來。看見藐姑下水，唯恐追之不及，就如飛似箭的跳下去，要尋着藐姑，与他相抱而死，究竟不知尋得着尋不着。

抱き合ったまま流された二人は、下流の嚴州府桐廬県で莫姓の漁師のしかけた網に引っかかり、救助される。李漁の生地蘭溪は衢州府と桐廬県の中間にあったから、李漁はこのあたりに土地勘があったはずである。以下は二人が救出される場面である。

且說嚴州府桐廬県，有個浜水的地方，叫做新城港口，不多幾分人家，都以捕魚為業。內中有個漁戶姓莫，人就叫他做莫漁翁。夫妻兩口搭一間茅舍，住在溪水之旁。這一日見洪水泛濫，決有大魚經過，就在溪邊張了大罾，夫妻兩個輪流扳扯。……原来不是大魚，却是兩個尸首，面對了面，胸貼了胸，竟像捆在一处的一般。莫漁翁見是死人，就起了一点慈悲之念，要弄起来埋葬他。就把罾索繫在樹上，夫妻兩個費尽許多氣力，抬出罾來。仔細一看，却是一男一女，緊緊揸在一处，却像在雲雨綢繆之際，被人扛抬下水的一般。

この、男女二人がヒシと抱き合った姿で水中から救出されるというモチーフだが、実は李漁の創案ではなかった。先に一部を引用した『警

世通言』巻23「楽小舎拵生覓偶」にすでに見えているからである。

五 抱擁の物語

——「楽小舎拵生覓偶」の場合

『警世通言』の巻23に収められている「楽小舎拵生覓偶」には、第三の潮神ともいべき石魂が登場している。以下に「楽小舎拵生覓偶」のあらすじを記しておこう。

南宋の都臨安の楽和と隣家の順娘とは幼馴染で、お似合いの夫婦とからかわれ、当人たちもその気になっていた。のちに愛し合うようになったが、結ばれぬまま歳月が過ぎた。楽和が結婚の実現を潮王廟に祈ると吉兆があった。八月十八日の銭塘江の玩潮の際、予想外の高潮が襲って、順娘が波にさらわれた。それを目撃した楽和は、泳ぎができないのを忘れ、救出に向かう。海中に飛び込んだ楽和は、潮王廟に導かれ、そこで授けられた順娘を抱きしめ、意識不明のまま浮上した。二人の意中を知った両家はすぐに結婚させた。

以下は、楽和が潮王廟で潮王の石魂に吉兆を見せられる場面である。

聞説潮王廟有靈，乃私買香燭果品，在潮王面前祈祷，願与喜順娘今生得成鴛侶。……忽見碑亭内坐一老者……楽和上前作揖，動問：老者尊姓？答道：老漢姓石。……老者引至一口八角井辺，教楽和看井内有縁無縁便知。楽和手把井欄張望，但見井内水勢什大，巨涛汹涌，如万頃相似，其明如鏡，内立一個美女，可十六七歳，紫羅衫，杏黄裙，綽約可愛。仔細認之，正是順娘。心下又驚又喜。却被老者望背後一推，剛剛的跌在那女子身上，大叫一声，猛然驚覺，乃是一夢，双手抱定亭柱。……楽

和醒將転来，看亭内石碑，其神姓石名魂，唐時捐財築塘捍水，死後封為潮王。楽和暗想，原来夢中所見石老翁，即潮王也。此段姻縁，十有九就。

かくて運命の八月十八日がやってくる。無我夢中で逆巻く怒涛に飛び込んだ楽和は、潮王から順娘を交付され、意識不明ながらしつかと抱き合つて水面に浮上し救出された。

却説楽和跳下水去，直至水底，全不覺波涛之苦，心下如夢中相似。行到潮王廟中，見灯燭輝煌，香烟繚繞。楽和下拜，求潮王救取順娘，度脫水厄。潮王開言道：喜順吾已收留在此，今交付你去。説罷，小鬼從神帳後將順娘送出。楽和拜謝了潮王，領順娘出了廟門。彼此十分歡喜，一句話也説不出，四只手兒緊緊對面相抱，覺身子或沉或浮，偶出水面。……喜公喜母丫鬟妳娘都来看時，此時八月天氣，衣服都單薄，兩個臉對臉，胸對胸，交股疊肩，且是摟抱得緊，分拆不開，叫喚不醒，体尚微煖，不生不死的模樣。

実のところ、両家が二人を結婚させたのは、衆人環視の中、二人がかくもあられもない姿で浮かび上がった以上、そうして体面を繕うしかなかったからに相違ないが、その点についてここで論ずることはしない。なにせよ、潮王が、愛し合う二人を結びつける粋な計らいをする神と認識されていたことに間違いはなさそうである。

六 曹娥の死の抱擁

「楽小舎拵生覓偶」にせよ「譚楚玉戯里伝情劉蕤姑曲終死節」にせよ、ヒシと抱き合う男女は恋人であり、その後いずれも息を吹き返し、

ハッピー・エンドに終わるのだが、それよりはるか以前に、抱き合う屍となって浮かび上がった父娘がいた。しかも、屍が浮かび上がるその江こそが、先の『古今小説』巻18「楊八老越国奇逢」において潮神馮俊を祀る順濟廟があるとされた清水閘が面する曹娥江であり、その娘こそ、曹娥江の名の由来となった曹娥であった。

曹娥については断片的な記述しかないが、とりあえず『全上古三代秦漢三国六朝文』の「全三国文」巻26に見える邯鄲淳の「孝女曹娥碑」の序文を引こう。

孝女曹娥者、上虞曹盱之女也。……盱能撫節按歌，婆娑樂神。以漢安二年五月，時迎伍君逆濤而上，為水所掩，不得其尸。時娥年十四，号慕思盱，哀吟沢畔旬有七日，遂自投江死。經五日，抱父尸出（古文苑）。

これによれば、曹娥の父曹盱は巫祝であって、「迎伍君逆濤而上，為水所掩」というから、おそらく江畔で潮神伍子胥を迎える神迎えの行事をしていて、順娘と同様、予想を超えて逆巻く逆流に吞まれて死んだのであろう⁵。曹娥はその屍を捜すべく自ら江中に身を投じ、父の屍を抱えて浮かび上がったというのである。「経五日」というから、曹娥も死んでいたことになる。身を犠牲にして父の屍を尋ね当てたゆえ、孝女とされたわけだ。ところが、「抱」すなわち抱き合って浮上したことを笑われた曹娥と曹盱の屍が一度沈み、しばらくして背中合わせとなって浮上したとする笑い話のような語り口の話や、それを反映する図があるという。魯迅は『朝花夕拾』の「後記」で、それを幼時に故郷紹興の老人から聞いた話、呉友如画の《女二十四孝図》に見える図として紹介している。その部分を以下に引こう。

我幼小時，在故鄉曾經聽到老年人這樣講：

“……死了的曹娥，和她的父親的尸体，最初是面對面抱着浮上来的。然而過往行人看見的都發笑了，說：哈哈！這麼一個年青姑娘抱着這麼一個老頭子！于是那兩個死尸又沈下去了；停了一刻又浮起来，這回是背對背的負着。”

好！在礼義之邦里，連一個年幼——嗚呼，“娥年十四”而已。——的死孝女要和死父親一同浮出，也有這麼艱難！

我檢查《百孝図》和《二百卅孝図》，画師都很聰明，所画的是曹娥還未跳入江中，只在江干啼哭。但吳友如画の《女二十四孝図》(1892)却正是兩尸一同浮出的這一幕，而且也正画作“背對背”，如第一図の上方。我想，他大約也知道我所聽到的那故事的。還有《後二十四孝図説》，也是吳友如画，也有曹娥，則画作正在投江的情狀，如第一図下⁶。

ただ、呉友如にしても、《女二十四孝図》の背中合わせの図を《後二十四孝図説》では差し障りのない「正在投江」の図に替えたというから、後には魯迅のいう「很聰明」な画師の仲間入りしたことになる。だが、背中合わせでは「抱」はおろか、背負うこともままならないから、図柄としてはもちろん、伝承にしても無理であろう。とはいえ、明・呂坤(1536-1618)の『閨範図説』巻2の「曹娥救父」は、「呂氏曰」として「負尸以出」と言い換えており、絵柄は背中から抱きかかえるものになっているから、魯迅の紹介する語り口自体はかなり以前から存在したと考えてよからう。呉友如は原名を嘉猷といい、江蘇元和、今の蘇州の人であった。

ひるがえって、魯迅がここで言及している『百孝図』は「会稽俞葆真蘭浦編輯」を銘打ち、同

治十一年(1872)年に出版されたものであるが、その「投江覓父」は『会稽典録』からとして、以下のように述べている。

漢曹娥上虞人、父盱善巫祝、午日迎神
泝涛而上、溺死、不得其尸。娥年十四、乃
投瓜于江、曰：父在、此瓜当沈。沿江号哭
十有七日。瓜沈。娥遂投江而死。抱父尸出。
上虞令以其事聞表為孝女、立祠江辺、至今
享祀不絶。

曹娥の事跡を記す最古の書、晋・虞預の『会稽典録』には伝本がなく、複数の輯本が作られている。魯迅が故郷の先賢の著述を集めた『会稽郡故書雜集』もそのひとつである。『会稽典録』の曹娥の記事は「後漢書」「列女伝・曹娥」唐・章懷太子李賢注、『世説新語』「捷悟第十一」梁・劉孝標注、『芸文類聚』卷4「歳時・五月五日」、『太平御覧』卷31「時序・五月五日」、『太平御覧』卷415「人事・孝女」などに見えるが、それぞれの採録方針の相違などにより、内容に出入りがある。のみならず、同一の書物にあっても版本により文字、甚だしくは文言を異にするから、虞預の原文を特定することは難しい⁷。たとえば、「瓜」の字については、これと字形の似た「衣」とするものがあり、その支持者の方が多い⁸。検討の対象を『会稽典録』以後に成立した書物、たとえば『世説新語』の編者である宋・劉義慶の『幽明録』（『芸文類聚』卷87「菓・瓜」所引）や夏侯曾先の『会稽記』（『太平御覧』卷978「菜茹・瓜」）にまで広げれば、瓜は沈むのではなく浮くことになっている⁹。しかし、『芸文類聚』並びに『太平御覧』の部立てから見て、その編集時点においては、曹盱が涛に吞まれる事件は五月五日に起こり、その屍の搜索に瓜がなんらかの役割を果たしたとされていたことに疑問の余地はなさそうである。ちなみに杭州湾

に注ぐ河川に起こる逆流、いわゆる銭塘潮（浙江潮）は農曆八月十八日のものが有名だが、季節による大小はあっても、毎月農曆の一日から五日と十五日から二十日に起こるというから、五月五日であっても差し支えはなかった。

だが、何より注目すべきは、宋初の『太平御覧』以前に成立した文献に引かれる『会稽典録』には「抱父尸出」に相当する記載が見えない点であろう¹⁰。宋・劉敬叔撰になる『異苑』卷10所収の曹娥故事は「遂投江而死」に続け「三日後与父尸俱出」とする。『白氏六帖事類集』卷1所引の『異苑』も同様ではあるが、『太平御覧』卷735「方術・巫」所引の『異苑』は「遂投江求之而死」で終わっている。唐代の『異苑』に「三日後与父尸俱出」に相当する部分がすでに存在していた可能性はあるが、現存の十卷本『異苑』が輯佚された明末に、その当時巷間に流布していた曹娥故事によってこの部分が新たに加えられた可能性もなくはあるまい¹¹。ちなみに、日本には中国で伝来の絶えた佚名の『孝子伝』の鈔本が二種伝わっている。陽明本と船橋本がそれである¹²。陽明本の成立は「隋までは降らず」、これと「同一系統のものながら後の改修を経たと思われる」とされる船橋本の改修時期は「おそらく唐代」であったとされる¹³。この二鈔本はその後の転写本であって、両者の間に文字のみならず文言の異同も少なからず存在しているが、孝子の数並びに収録順序をほぼ同じくしていることから、同一の『孝子伝』の異なる時期の鈔本と考えられているのだが、その「曹娥」の条に柳瀬喜代志のいう没水獲翁譚¹⁴はなかった。

七 叔先雒から曹娥へ

では曹娥の故事に没水獲翁譚が伴うようになった時期はいつごろで、何にもとづいたのであ

ろうか。孝子譚を収める現存の書物としては、先の佚名の『孝子伝』のほかに、『全相二十四孝詩選』系統、『日記故事』系統、『孝行録』系統の三系統の書物が存在することが知られている¹⁵。このうち曹娥故事を収めるものは『孝行録』系統のみである。

『孝行録』は中国では失われた佚書で、元の至正二十三年(1363)に高麗で刊行されたことが知られ(ただし現存しない)、三者のうちでは成立が最も遡ると考えられるが、その全六十二条のうち、李齊賢が賛を附した前半二十四条で取り上げられる孝子が宋元の墓室壁画に残された孝子の顔ぶれと一致していることにより、宋元時期までの二十四孝図の内容を伺わせる貴重な資料とみなされている。そのうちの、『全相二十四孝詩選』に含まれない九故事のひとつが曹娥故事であるが、そこにはすでに没水獲翁譚が見えている¹⁶。ちなみに、先の佚名の『孝子伝』は、二鈔本とも没水獲翁譚に言及しない。『全相二十四孝詩選』の系統や『日記故事』系統の「廿四孝」に曹娥は登場しないが、『日記故事大全』と題する万暦間劉龍田刊本の寛文九(1669)年の和刻本の巻3「孝感類」には、「投江抱父」と題する没水獲翁譚を伴った曹娥故事が見える。没水獲翁譚は佚名『孝子伝』と『孝行録』の間、おそらく宋元以前に曹娥故事に加わったとみてよからう。

そこで問題となってくるのが、先に引いた邯鄲淳「孝女曹娥碑」序文の存在である。これが真に邯鄲淳の序文であるなら、曹娥の死の直後から曹娥故事は没水獲翁譚を伴って語られていたことになるからである。しかし、出典とされる『古文苑』は、『四庫全書總目提要』巻186「集部・總集類」によれば、そこに収められる漢魏の詩文の多くは類書から刪節したものであり、石鼓文も近本と同じであって、「其真偽蓋莫得而明也」とされるから¹⁷、「孝女曹娥碑」序文は偽

作であり、その「経五日、抱父尸出」についても、宋代以後の、改変された曹娥故事の語り口により新たに付加されたものである可能性があらう。曹娥故事は宋代までに変身を遂げていたに相違ない。

では曹娥故事の変身は何によって触発されたのか。案ずるに、先の三系統の孝子譚のいずれにも収められていない、孝女叔先雄の故事によったに相違ない。以下に陽明本の『孝子伝』からそれを引いておく。

孝女叔光雄者至孝也。父墮水死。失尸骸。感憶其父，常自号泣，昼夜不已。乃乘船於海父墮処，投水而死。見夢，与弟曰：却後六日，当共父出。至期，果与父相見持於水上。郡懸[県]令為之立碑文也。

この話、実は曹娥の伝を収める『後漢書』「列女伝」にも収められていた。比較のために、それも以下に引いておこう。

孝女叔先雄者犍為人也。父泥和，永建初為県功曹。県長遣泥和舁檣謁巴郡太守，乘船惶湍水物故，尸喪不歸。雄感念怨痛，号泣昼夜，心不図存，常有自沈之計。所生男女二人，並数歳，雄乃各作囊，盛珠環以繫児，数為訣別之辞。家人每防閑之，経百許日後稍懈，雄因乘小船，於父惶処慟哭，遂自投水死。弟賢其夕夢雄告之：卻後六日，当共父同出。至期伺之，果与父相持，浮於江上。郡県表言，為雄立碑，図象其形焉。

六日後に「与父相持，浮於江上」したというから、二人の屍は抱き合って浮上したことになる。なお、「叔光雄」の「光」は「先」の誤写である(叔先は複姓)。また、孝女の名としてふ

さわしくない「雄」は字形の似た「雒」の誤写であろう。案ずるに、曹娥の孝女譚は、『後漢書』成立後¹⁸のある時点、おそらく唐初に、水死した父の遺骸を求めて水中に身を投ずる点で共通する叔先雒の没水獲翁譚を吸収し我が物としたのではあるまいか¹⁹。唐・太宗御撰の『晋書』「隱逸伝・夏統伝」が曹娥に言及し、「父子喪尸後乃俱出」とあること、ならびに犍為といえは四川であるにも関わらず、叔先雒が海に身を投げたとされている点も、叔先雒故事の曹娥故事への接近を示す証左といえるのではあるまいか。思うに、曹娥故事の変身と唐朝による正史の編纂の間にはなんらかの関連があるのではあるまいか。

ひるがえって、曹娥故事変身の時期が唐代に遡る可能性があるなら、先の「孝女曹娥碑」の序文に見える「迎伍君逆涛而上」の「迎伍君」についても、虞預の原文にあったものか、再考する必要が生じよう。『世説新語』「捷悟第十一」劉孝標注所引『会稽典録』の「迎伍君神泝涛而上」²⁰についても、唐鈔本、宋刊本とも文言を同じくするものの、唐代に改変を経ている危惧はぬぐえない。『後漢書』「列女伝」が「於甌江泝涛」とするのみで伍君に触れず、逆に『世説新語』にない「五月五日」に言及する点も気がかりである。五月五日といえは、これも恨みを呑んで汨羅江に沈んだ屈原が連想されるからである。とはいえ、屈原が涛を立てたという話は、先に引いた『論衡』が「屈原懷恨，自投湘江。湘江不為涛」とするよう、知られてはいない。案ずるに、六朝から唐にかけて、この「泝涛」あるいは「逆涛」する神を屈原とするか伍子胥とするか定まっていなかった時期があって、後日、その屈原派によって「五月五日」が、伍子胥派によって「伍君」ないし「伍君神」が加えられたのではあるまいか(五と伍は音を同じくする。ただし、そのいずれが先であったかの判断は難

しい)。だが、この争いは舞台が曹娥江であっただけに地の利のない屈原に勝ち目はなく、伍子胥に落着いたのではなかったか。ちなみに、五月五日は屈原の命日とされていた。

閑話休題。「楽小舎拵生覓偶」ならびに「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」の背景に潮神伍子胥(とその仲間)の神話があったことは間違いないところであろう。しかし、それを潮神による抱きあう男女の縁結び譚に変身させるに預かって力があつたのは、孝女叔先雒故事により変身した曹娥故事、曹娥とその父親の抱きあう屍の伝承だったに相違ない。

八 李漁の創作

——「張廷秀逃生救父」からの

李漁が「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」を創作する際、「楽小舎拵生覓偶」を念頭においていたであろうことに疑問の余地はないが、そうした先行作品は「楽小舎拵生覓偶」のみではなかった。すでに紹介済みの「張廷秀逃生救父」や「楊八老越国奇逢」も同様に李漁の創作に大きな影響を与えていた。まずは「張廷秀逃生救父」について記そう。

文秀と同時に「餛飩相似」の姿で長江に投ぜられた廷秀は大波で沙洲の芦辺に打ち上げられ、浙江紹興府孫尚書おかかえの芝居一座に助けられる。喉を痛めた生の替わりを探していた座長の潘忠は、廷秀を生にと考え、蘇州にゆくはずの行き先を急遽南京に変え、因果を含めて生になるよう勧める。廷秀はもともと聡明だったから、たちまち一座の花形になり、半年ほどで帰郷の旅費もたまつたが、その金を潘忠に隠されたうえ嚴重に見張られ、一座からぬけられなくなってしまう。南京で一年近く役者稼業をしていた廷秀のもとに、邵承恩という救世主が現われる。礼部主事だった邵承恩の六十の誕生日に

同僚が廷秀の一座を呼んで興行をさせたおり、邵承恩が廷秀に目をつけ、残るよう申し付けた。これにはさすがの潘忠も反対できなかった。廷秀は邵承恩にこれまでの経緯を逐一話した。子がなかった邵承恩は人柄と能力を見込み、廷秀を義子とし、邵翼明と改名させて科挙の試験に備えさせることにした。潘忠はやむなく金をもらって引き下がった。

かくして科挙の時がやってくる。廷秀と文秀は都でたまたま隣同士に止宿することになり、毎度顔を合わせるようになったが、一方は浙江の邵翼明、他方は河南の褚嗣茂と名乗っていたため、見覚えこそあったが兄弟とは思ひもよらなかった。科挙が終わり、受験生たちは発表までの間三々五々遊びまわりますが、心に秘めるものがある二人は宿舎を一步も出なかったから自然打ち解け、ようやく兄弟とわかった（この設定はかなり無理な気がする）。結果が発表になると、二人はともに二甲であった。かくして翼明すなわち廷秀は南直隸常州府推官となり、嗣茂すなわち文秀は庶吉士として翰林入りすることになった。庶吉士は三年の任期後の試験に合格すれば中央官になれるから、出世コースといってよかろう。しかし、父を救いたい一心の文秀はすぐに休暇を願い出て、兄とともに蘇州に帰ることにした。いうまでもないが、常州は蘇州の近くであった。

兄とひとまず南京にいった文秀は、邵承恩夫婦に一人娘との縁談をもちかけられる。文秀が父母の了解を得なければとっているおりもあり、承恩に福建提学僉事へ任命する知らせがとどく。福建への道なら蘇州を通るから先にいってお待ちしておりますといい、兄弟二人は船で先発し、身分を隠して胥門に船を停泊させ、役人のみなりはせず、供もつれずにこっそり母陳氏に会いにゆき、これまでの事情を話す。蘇州は城壁のそとを運河がとりまき、それが大運河

に繋がっていた。陳氏は張権が種義のお蔭により、獄中ではあるが安穩に暮らしていることを伝える。

翌日二人は公服に着替え、役所に乗り込む。太守に先立ち刑獄のことを司る理刑の朱推官に刺を通ずると、朱推官の父親が邵承恩の同年であることがわかる。二人を下にもおかず歓待する朱推官に、兄弟は協力を要請する。もちろん太守も協力を約束する。船に引き返した廷秀は、貧乏人のなりをして専諸巷の王憲の家の様子をさぐることにした。王家には二年前に買官のために上京し、山西平陽府洪同県丞の職を得た趙昂が帰宅したばかりで、芝居の一座を呼んで浮かれ騒いでいるところだった。廷秀は玉姐が婿でもとったのかと怪しんだが、顔見知りの王進から委細を聞き安心したのち、屋敷に乗り込み、義父の王憲に直面する。廷秀が出世したことを知らない王憲は、廷秀が趙昂のために一曲歌おうというのを聞いて腹を立てる。趙昂も怒り出し、廷秀を屋敷から追い出そうとするが、とりなす人がいて、とにかく歌わせようということになった。廷秀は「祭江」の一幕を歌おうと言い出す。その時演ぜられていた芝居が王十朋を主人公とする『荊釵記』だったからである。

『荊釵記』は、宋代の実在の人物王十朋とその妻錢玉蓮を主人公とする、全四十八幕からなる伝奇である。貧しいが才学のある王十朋を慕った錢玉蓮は、自分の髪に挿していた荊釵を渡して婚約のしるしの品とさせる。玉蓮の美貌を知った孫汝権は玉蓮の継母姚氏を抱き込んで玉蓮をわがものにしようとするが、玉蓮に拒まれる。これを恨んだ姚氏は、婚資を一切持たせず王十朋に嫁がせる。半年後科挙に及第した王十朋は、饒州僉判を授けられる。万俟丞相に娘婿となるよう望まれるが、妻がいると断ったため帰郷を許されず、家族を呼び寄せようとした手紙も、孫汝権によって丞相の婿になったから妻

を離縁すると書き換えられてしまう。ちなみに、伝奇の定番は科挙に合格した男に時の権力者から縁談が持ち込まれ、辛酸をなめさせられた糟糠の妻が最後に幸せを得るというものであり、『荊釵記』もその線に沿った作品であった。

改嫁を迫られた玉蓮は江に身を投げるが、福建安撫使に赴任途中の銭載和に救助され、同姓ゆえにその義女となる。玉蓮が江に身を投げたことを知った王十朋の母張氏は、江辺で玉蓮を祭ったあと、都に息子をたずね、その経緯を知らせる。後日王十朋も妻を江辺に祭る。「張廷秀逃生救父」のいう「祭江」は後者であろう。思い通りにならなかった万俟丞相は、十朋の任地を瘴癘の地、広東潮陽に改める。福建に赴任した銭安撫は饒州に使者を遣わし、玉蓮のことを十朋に伝えようとした。ところが、たまたま十朋に代わった饒州僉判も王姓であって、風土が合わず病死したばかりだったため、玉蓮には十朋が死んだと伝わる。かくして王十朋と銭玉蓮の夫婦は、互いに相手が死んだものと思い込んでしまう。万俟丞相が更迭されると、この間の治世を評価された十朋は吉安の太守に昇任する。新たな任地に赴任途中の銭安撫が玉蓮を連れて吉安の十朋のもとを表敬訪問し、義女の玉蓮を十朋に嫁がせようとする。事情を知らない二人は互いに操を守って結婚しようとしなが、たまたま正月十五日の上元節に玄妙観で行なわれた亡魂の追善供養のおりに巡り合い、荊釵がしるしとなってもとの鞘に納まる。以上が『荊釵記』のあらすじである。

『荊釵記』は『拜月亭』・『白兔記』・『殺狗記』とともに四大南戯とされる古い作品であって、現存するテキスト間には細かな差異が存する。焼失した世徳堂本（の鈔本）²¹によれば、王十朋の母張氏が江辺で嫁の玉蓮を祭る第32出が「祭婦登程」、王十朋が妻玉蓮を祭る第35出が「江畔祭妻」と命名されている。「張廷秀逃生救父」

の「祭江」は、生だった張廷秀が登場し、奥に引きこもっている玉姐に自身の帰還を知らせるために歌う場面であったから後者に相違ないが、「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」の「祭江」は玉蓮が身投げする場面が含まれていなければならず、後者のはずがない。「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」の「祭江」の場には譚楚玉の出番がなく、劉藐姑の最後の呼掛けに応じて楽屋をとびだし、そのまま大溪に跳び込む設定になっているのがその証拠である（ちなみに、玉姐の名は玉蓮を念頭に案出されたものであろう）。それなら「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」の「祭江」は前者かということ、そうとも言えないのである。そこに玉蓮が身投げする場面が存在しないからである（ちなみに、世徳堂本は玉蓮が身投げする場면을第28出「玉蓮投江」とする）。案ずるに、孤閨を守る玉姐に張廷秀が呼掛ける場面が必要な「張廷秀逃生救父」は、『荊釵記』の王十朋が亡妻銭玉蓮の貞節を悼む場面、すなわち「江畔祭妻」を使い、劉藐姑が身投げする場面が必要な「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」は銭玉蓮が江に身を投げる場面「玉蓮投江」を「祭江」の名のもとに使ったのであろう²²。このことから、李漁が「張廷秀逃生救父」の存在を強く意識し、こじつけを承知で、いわば「張廷秀逃生救父」の作者と張り合う形で「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」を創作したことがわかる。

九 「張廷秀逃生救父」の創作 ——「楊八老越国奇逢」からの

李漁は「張廷秀逃生救父」を意識しつつ「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」を創作した。では「三言」第二の長篇で、後日それも原因となって、『醒世恒言』の再版本からは省かれることになる「張廷秀逃生救父」の場合はどうであ

ったのか。「張廷秀逃生救父」の作者は伍子胥の神話と鼈霊の神話を融合させ、前者についてさまざまなコードを作品のなかにちりばめ、読者に挑戦し、見巧者にその仕掛けを読み解くことを求めた。自身の創作にそれなりの自信を持っていたといえよう。のみならず、二つの神話の融合以外にもいくつかの新たな試みをしている。小説という形式のなかにそのストーリーの展開と密接な関係を持つ戯曲を演ずる場面を持ち込み、小説と芝居が一体となった作品とした点がそのひとつであるが、これについてはすでに言及した。以下においては、まず詳細でなおかつ滑稽な玉姐の首吊りの場面を取り上げる。

廷秀を追い出した王憲に縁談を迫られた玉姐が、夜中に首吊りを計る。当然ながら玉姐は死なない運命にあった。ヒロインが死んでは話が成り立たないからである。とはいうものの、玉姐救命の経緯はあまりにどたばたかつ下品に描かれている。作品の構成上からも欠くべからざるものとはみなせない。「張廷秀逃生救父」の作者がもとづいた、あるいは念頭においた作品が別にあり、そのためかくのごときちぐはぐな様相を呈する結果となったのかも知れない。

すなわち、玉姐づきの腰元の一人が腹を壊し、夜おまるを探していて梁からぶら下がっている玉姐を見つけ、驚きの余り垂れ流してしまう。その声を聞きつけた玉姐の両親が半裸であわてて二階に上がろうとするが、階段を踏み外し、挙句二人で着るものをめぐって争う。なんとか娘の部屋に駆けつけるが、戸を中から開けるべき腰元が自分の粗相の後始末に気をとられて手間取る。中に入って垂れ流しの様子を見た母親の徐氏がこれではたすからないと泣き出すが、王憲が娘を梁から下ろして衣装が汚れていないとわかり、見込みがあるとあわてて介護するなど、これでもかとばかりに糞尿譚を続けるのである。前後の部分との調和を乱してそこま

で書く必要があったかは疑問である。

こうした糞尿譚が小説に登場するのはおそらく明末清初からで、たとえば『照世杯』巻4の「掘新坑慳鬼成財主」がその例に挙げられる。『照世杯』の作者は筆名を酌玄亭主人といい、『照世杯』以前に第一種快書『閃電窗』を書いていた。『照世杯』は第二種快書を銘打つから、その二作目であったと推定される。『閃電窗』の酌玄亭主人が『照世杯』では酌元亭主人と変わっており、康熙帝玄燁の玄を憚ったためと推定されるから、『照世杯』の出版時期は康熙に入るとみてよい。あらすじは、主人公穆棲梧が今の公衆便所にあたる施設を開設し、糞尿を肥料として売って大もうけをするというものであるが、中間に滑稽で卑猥な描写を交える点に特徴がある。公衆便所で大儲けするという奇抜な発想こそないものの、卑猥で滑稽な糞尿譚という点では「張廷秀逃生救父」のこの部分が『照世杯』の「掘新坑慳鬼成財主」の先蹤といえよう。

糞尿譚の場合とは異なり、兄弟二人同時に科挙への合格と引き続く父の苦難からの救出の構想については、「張廷秀逃生救父」の作者が意識または念頭においた先行作品が特定できる。すでに言及済みの『古今小説』の巻18の「楊八老越国奇逢」がそれである。以下にそのあらすじを紹介しておく。

陝西府藍屋県の楊復小名八老は、暮らしに困り、妻李氏と一子世道を残し、隋童を伴って福建の漳浦へ商いに行った。その地で嬖媽媽の未亡人の娘を現地妻に迎え、嬖世徳をもうけた。世徳が三歳のとき、帰国の途中倭寇に捕えられ日本に連れ去られた。十九年後、倭寇の一員として温州攻撃に加えられる。このおり元軍の普花元帥が倭寇を破り、八老ら十三人の中国人たちは元帥配下の王千戸に捕えられた。八老が隠れていて千戸に捕まった廟こそが、すでに何度か言及した、馮俊を祀る順濟廟であった。八老

はここで千戸の部下となって名も王興と改めた隋童に再会し、そのとりなしで紹興郡丞楊世道のもとに送られる。八老は取り調べにあたった楊郡丞に整屋の家族のことを語った。それを聞いた郡丞は、自分と母のことではないかと疑うが、八老が漳浦に旅立った時に七歳だったため判断がつかね、母に確かめてもらう。かくして楊世道と八老は親子の名乗りを上げることになった。この出来事を聞いた紹興府の槩太守が楊郡丞のもとに祝賀にやって来る。楊郡丞がなぜ倭寇の捕虜にされるような目にあつたのかと聞いたことがきっかけとなり、槩太守が八老のもう一人の息子槩世徳とわかる。かくして二夫人二子との団円となった。そもそも槩太守がわざわざ楊郡丞のもとを訪ねたのは、二人がもともと同年の進士だったからであった。つまり、兄弟二人が、それと気づかぬまま同時に科挙に合格していたのである。ただ、このことは最後の最後に明らかにされており、離れて互いにその存在を知らぬまま成人した異母兄弟との設定もあって、「張廷秀逃生救父」に比べストーリーの展開が自然であり、破綻もない。

「楊八老越国奇逢」は、日本に連行された期間を含む十九年の苦難の末、一朝にして二子双妻を手にいれ富貴な身分となった父親楊八老に焦点あてた作品であるが、「張廷秀逃生救父」は、父親を救おうとする二人の孝行息子が、大波を起こした潮神のお蔭をこうむり、九死に一生を得て、同じ年に進士となって復讐し、それぞれ新妻を手に入れるとなっている。しからば、「張廷秀逃生救父」は「楊八老越国奇逢」にヒントを得て、その構想を逆転させたものといえるのではないだろうか²³。

小結 明末清初の小説作家たち

ここで以上に述べてきたことをまとめておき

たい。

呉越の地には杭州湾に注ぐ複数の江に起こる逆流現象を反映した潮神神話が次々と生まれた。戦国時代の伍子胥、唐の石瑰、宋の馮俊、(宋または)元の晏公などがそれである²⁴。これらの潮神が登場する物語の代表が、『呉越春秋』に代表される伍子胥の神話であって、「楽小舎拵生覓偶」、「楊八老越国奇逢」、「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」はそれを念頭に創作された作品であった。伍子胥は钱塘江一帯で、石瑰は杭州、馮俊は曹娥江、晏公は钱塘江の上流部でそれぞれ祀られていたとされる。钱塘江の名は钱塘県にちなみ、それ以前は長江と呼ばれていた。王充により逆流は生じないとされた長江(揚子江)ではあるが、その実逆流現象は存在しており²⁵、屍が遡る鼈霊の神話がそもそもそれを反映する神話であった可能性もあった。それゆえ、「張廷秀逃生救父」が伍子胥の子で鼈霊の孫ともいえる作品であった可能性は高い。

馮俊が潮神として祀られる曹娥江には、逆流に吞まれて死んだ父の遺体を求めて江に身を投げた曹娥が、父と抱き合った屍となって浮上したという伝承があった。この伝承を、南宋臨安の玩潮(弄潮)のうちに逆流に攫われた娘をその幼馴染が救おうと钱塘江に跳び込み、潮神の粋なはからいで抱き合せて生きて浮上すると変えた作品が「楽小舎拵生覓偶」であって、それをさらにひとひねりし、救助も間に合わないほどの激流に流されるとしたものが「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」であった。

「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」は、「楽小舎拵生覓偶」のみならず、「張廷秀逃生救父」の、男の主人公(の一人)を役者とし、ストーリーの重要な構成要素に『荊釵記』を用いるという手法を拝借し、男女の主人公をともに役者と変え、さらには「張廷秀逃生救父」では一度であった芝居の場面を二度に互って使って見せ

た。李漁の、小説の構成にこだわり他人に負けまいとする、負けず嫌いな性格がよく伺える作品といえよう。李漁は「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」のこの趣向が自慢であつたらしく、また小説は「無声戯」であるとの自身の主張を実行すべく、それを『比目魚』²⁶ という伝奇にもしてみせた。ただ、銭塘江の逆流がそこまで遡ったか否かは問わぬにせよ、水に落ちた二人を救助することもできないほどの水量豊かな急流であつて、それに面する晏公廟を併せ持つ埠が果たして実在していたかは甚だ疑問である。土地勘がある、否土地勘のある李漁だからこそ適当な埠を探しあぐね、それを空白のままに残す羽目になったのではあるまいか。

李漁の「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」はもちろんだが、『醒世恒言』に収められる「張廷秀逃生救父」にせよ、『警世通言』に収められる「楽小舎拚生覓偶」、『古今小説』に収められる「楊八老越国奇逢」にせよ、いずれも明代以降の創作である可能性が強いとされる。佐藤晴彦によれば、その言語的な特徴からみて、「張廷秀逃生救父」ならびに「楽小舎拚生覓偶」は馮夢龍以外の明人の創作²⁷で、前者については「馮夢龍の言語環境に極めて近い人物」と指摘されている。つまり馮夢龍ではなくともその同時代人で馮夢龍と同じ蘇州人である可能性が高いことになろう。「楽小舎拚生覓偶」にはそれほど明確な言語的特徴はないようだが、作者が杭州の風俗を知り尽くしている人物であることに疑問の余地はない。「楊八老越国奇逢」の作者については馮夢龍と同時代人とも言い難いようだが²⁸、杭州湾をはさみ杭州と向かい合う上虞、紹興近辺に土地勘のあつた人物であることは明らかである。李漁はもちろん銭塘江上流の浙江蘭溪の人であつた。もちろん、「三言」所収の上記の作品の作者がすべて別人とは限るまい。すべてまたはその一部が同一人、甚だしくは馮夢龍であ

る可能性もなくはあるまい。仮にそうであつたにしても、こうした状況は、明末清初の時期に、蘇州・杭州を含むこの地域に、互いに意識しい小説²⁹の創作に励む作家の一群が存在していたことを意味しよう³⁰。そうした互いに対抗心を燃やしつつ創作に励む作家群の掉尾を飾る作家が李漁だったのである。

注

- 1 『金田鶏』所収、1929年。
- 2 北田英人「中国江南三角洲における感潮地域の変遷」（『東洋学報』63・3・4、1982）及び「八至十三世紀江南の潮と水利・農業」（『東洋史研究』47・4、1989）、並びに馮賢亮『太湖平原的環境刻画与城郷変遷（1368-1912）』（上海人民出版社、2008.8）第五章「江海溝通：潮汐、潮災与沿海地方民生」による。
- 3 晏公は多く元の晏戣仔とされるが、宋の晏敦復とする説、孫呉の人とする説もある。
- 4 李漁は清初の順治年間に短篇十二篇からなる『無声戯小説』を出版し、その後の順治十一年から十五年の間に第二小説集『無声戯二集』を出版した。しかし、その後まもなくこの両者から十二篇を選んだ作品集『無声戯合集』を出版した。省かれた作品に禁忌に触れる部分があつたからと推定されている。だが、政情が変化したためか、康熙に入り、削除した六篇を外集として復活させ、『無声戯合集』分とあわせ、『連城壁』十二集外編六巻と改名のうえ出版した。よって、「譚楚玉戲里伝情 劉藐姑曲終死節」は李漁の手で少なくとも三度に亘り、面目を改めて出版されたはずであるが、『無声戯二集』が現存せず、北京大学図書館所蔵の『無声戯合集』が見られなかったため、佐伯市立図書館所蔵の『連城壁』十二集外編六巻と、これを抄写したと思われる大連図書館蔵鈔本によつた。両者はともに埠の直前の二字分を空白とする。おそらく、この作品の要諦である、人二人を救出もままならぬほど急速に流し去るほどの大溪に臨む晏公廟がある埠を探しあぐねたためであろう。なお、『無声戯二集』、『無声戯合集』、『連城壁』三者の版本は、基本的に同一であつたと考えられている。
- 5 この「迎伍君逆濤而上」は、一般には「迎伍君、逆濤而上」、すなわち「伍君を迎へんとして、濤に逆ひて上るも」と読まれているが、「伍君の逆濤により上るを迎へ」あるいは「伍君の濤を逆へて上るを迎へ」と読むべきであろう。稲畑耕一郎「嫁与弄潮児」と

「休嫁弄潮児」一弄潮の詩とその民俗起源について」(『中国詩文論叢』1、1982)は、後述する『世説新語』捷悟篇の劉孝標注に引かれる『会稽典録』の「迎伍君神、沂濤而上」の「沂濤而上」を「波乗り」のさまを敍べた語」とみて、『後漢書』「列女伝」の「於県江沂濤、婆娑迎神」を参照しつつ、「波の上で「婆娑」したとすれば、そのさまは後世の「弄潮」に一層近い」とする。福本雅一も「孝女曹娥碑をめぐる」(『中国文学研究 上』所収、芸文書院、2006。原載立命館大学中国芸文研究会『学林』28・29、1998)で「現在『古文苑』によって伝えられるこの碑文は、おそらく唐代か宋初に偽作されたもの」、「再論 孝女曹娥碑をめぐる」(『中国文学研究 上』所収。原載『国学院中国学会報』44、1998)で「この碑文は…熙寧から元祐にかけての二・三十年間に偽作されたのではないかと」、あわせて『古今圖書集成』「職方典」巻990・紹興府部彙考8・祠廟考1に見える「借潮」を「巧みに潮に乗ることではないかと推測」し、「曹娥の父はそのことに失敗して溺死した」とし、サーフィン説をとる。本文で後述するごとく、筆者は『古文苑』所引の邯鄲淳「孝女曹娥碑」を偽作とすることには賛意を表するものであるが、「孝女曹娥碑」以外の文献にも見える「逆濤而上」を、他に「用例を検し得ない」『古今圖書集成』の「借潮」によって、宋代の「弄潮」の習俗があたかも曹娥の時代にすでに存在していたかのように論じ、「撫節按歌」と「逆濤而上」を同一の、十四歳の娘のいる「巫祝」(『後漢書』による)の行為とする議論には与さない。「逆濤而上」は神の行為であって、「婆娑」は神を迎え楽しませるための「巫祝」による舞踏のさまを述べたものとみるべきであろう。なお、『後漢書』の「於県江沂濤」の「沂濤」については「祈濤」ないし「祈禱」の誤りの可能性があると考えられるものであるが、ここではその指摘のみに留める。

- 6 ここで「第一図の上方」とか「第一図下」といっているのは、「後記」に附された図を指している。就いて参照されたい。
- 7 上掲の『会稽典録』も魯迅の『会稽郡故書雜集』所収のものと異なる。
- 8 たとえば、楊勇『世説新語校箋』(香港・大衆書局、1969)や竹田晃「鎮魂と招魂」(『中国の幽霊』所収、東京大学出版会、1980)など。ただし、筆者は『西遊記』の「劉全進瓜」との関係や、瓜ならぬ瓢箪が弱水に相当する流沙河を沈むことなく三蔵一行を渡したことに鑑み、衣でなく瓜ではないかと考えている。
- 9 柳瀬喜代志「曹娥没水獲翁譚と求屍故事」(『日中古

典文学論考』所収、汲古書院、1999。原載『學術研究』30、1981)並びに、下見隆雄「曹娥の伝記説話について」(『儒教社会と母性 母性の威力の観点でみる漢魏晋中国女性史』増補版所収、研文出版、2008。原載『中国研究集刊』25、1999)に詳しい。

- 10 魯迅は、『会稽郡故書雜集』所収の『会稽典録』「曹娥」の条のこの部分を「三日後、与父尸俱出」とし、校注で、これについては陳元靚の『歳時広記』巻23によったこと、『事類賦注』では「数日抱父尸出」とすることを述べる。また、序文で『会稽典録』が『宋史』「芸文志」には著録されないことを指摘する。
- 11 胡道静『中国古代の類書』(中華書局、1982)によれば、『白氏六帖事類集』は本来「不載所出書」で、「其偶有標記出处的、当為刻書之時或刻書前所混入」したもの、現存の宋本に見える出處は『郡齋讀書志』を著した晁公武の曾祖父晁仲衍によって「添注出経」されたものであるという。したがって、晁仲衍の見た『異苑』ではすでに「三日後与父尸俱出」となっていた可能性はあるが、白居易の見たそれもすでにそうであったとすることはできない。
- 12 この『孝子伝』については、幼学の会編になる『孝子伝注解』(汲古書院、2003)を参照されたい。
- 13 西野貞治「陽明本孝子伝の性格並に清家本との関係について」(『人文研究』7-6、1956)及び黒田彰『孝子伝の研究』(思文閣出版、2001)による。ちなみに清家本と船橋本は同じもの。
- 14 注9の柳瀬論文による。
- 15 徳田進『孝子説話集の研究』中世篇(井上書房、1963)による。なお、橋本草子「全相二十四孝詩選」と郭居敬「二十四孝図研究ノート その一」(『人文論叢』43、1995)、『孝行録』と『全相二十四孝詩選』所収説話の比較—二十四孝図研究ノート その二—(『人文論叢』44、1996)、「日記故事」の版本について—二十四孝図研究ノートその三—(『人文論叢』46、1998)、『全相二十四孝詩選』と郭居敬(承前)—二十四孝図研究ノートその四—(『人文論叢』55、2007)、『慶応義塾大学斯道文庫蔵写本「廿四孝詩」について」(『人文論叢』56、2008)、「日本に於ける『全相二十四孝詩選』の受容」(『集刊東洋学』100、2008)並びに梁音「二十四孝の研究—宋・遼・金の孝子図と『孝行録』—」(『名古屋大学人文科学研究』31、2002)などを参照した。また、上記三系統発生以前の孝子譚を収める書物として、唐宋の各種類書所収の『孝子伝』などがあるが、そのいずれにも曹娥故事は収められていない。鄭阿財『敦煌孝道文学研究』(石門図書公司、1982)ならびに注13の黒田彰『孝子伝の研究』を参照されたい。

- 16 内閣文庫所蔵の林氏旧蔵鈔本及び南葵文庫蔵鈔本による影印本（前掲注 13 の黒田彰『孝子伝の研究』所収）による。
- 17 『四庫全書總目提要』巻 186「集部・總集類」から関連部分を引いておきたい。
不著編輯者名氏、凡二百六十余首、皆史伝文選所不載。然所録漢魏詩文、多從芸文類聚、初学記刪節之本。石鼓文亦与近本相同。其真偽蓋莫得而明也。
- 18 『後漢書』は宋の范曄の撰になるが、現存本はすべて唐の章懷太子李賢の注が附されている。
- 19 趙翼『二十二史劄記』巻 5 の「曹娥叔先雄」は、范曄の『後漢書』によって二人の事跡を紹介した後、「二女事正同、又同在列女伝、且曹娥未獲父屍、叔先雄則偕父屍同出、更为靈異。乃曹娥至今膾炙人口、而叔先雄莫有知其姓名者、豈非一碑文之力耶、則伝不伝豈不有命耶」とする。
- 20 魯迅輯本の『会稽典録』は「迎伍君神、溯濤而上」とする。
- 21 『京都大学漢籍善本叢書』第 14 巻（同朋舎、1981. 7）に収められている。原本は旧阿波文庫、光慶図書館蔵本。
- 22 『六十種曲』では、前者は第 28 出「哭鞋」、後者は第 30 出が「祭江」とされ、玉蓮が身を投げる場面は第 26 出「投江」に見える。
- 23 「張廷秀逃生救父」にせよ「楊八老越国奇逢」にせよ、先行する「話本」の存在は確認されていない。よって、その成立時期については、それぞれを収める『醒世恒言』と『古今小説』の刊行時期に準じて考えざるをえない。
- 24 朱海浜『祭祀政策与民間信仰変遷—近世浙江民間信仰研究』（復旦大学出版社、2008）の第二章四「明末清初錢塘江江神伝説的出現」は雍正『浙江通志』巻 218「祠祀二・杭州府・海寧県」により、そこで論ぜられる周雄以外の錢塘江の江神、潮神として海神廟に従祀された者として以下の者を挙げるが、伍子胥は挙がっていない。
祀越大夫文种、漢忠烈公霍光、晋横山公周凱、唐潮王石琬、昇平將軍胡暹、宋周宣靈王雄、平浪侯捲簾使曹大將軍春、護国宏佑公朱彝、広陵侯陸圭、静安公張夏、転運使判官黃恕、元平浪侯晏戊仔、護国佑民永固土地彭文驥烏守忠、明寧江伯湯紹恩、茶槽土地陳旭。
また、周雄以前に錢塘江の江神として流域で祀られたものとして、平浪侯晏公、金元七総管、金龍四大王を挙げるが、これらはいずれも錢塘江流域固有の水神ではなく、その上中流域には固有の水神が育つ

ていなかったとする。

- なお、周雄が神として祀られたのは、「死而屍浮於水亭灘，流去復來」がきっかけだったというから、伍子胥ほど劇的ではなくとも同様な「奇瑞」があり神とみなされたことがわかる。朱海浜によれば、明清間において周雄を祀る祠廟は、錢塘江とその上流の衢江、新安江一带を中心に、浙江省、安徽省、江西省の 67 箇所に亙るといふ。
- また、注 2 の馮賢亮の書によれば、上虞では宋の陳賢が顯応侯となり、護国潮神に封ぜられたという。
- 25 注 2 の馮賢亮の書の第五章は、長江下流沿岸の金山・華亭にいたる地域は、潮の満干に起因する逆流現象、地震による津波、台風による高潮などによる被害を度々被っていたこと、上海の外岡地区には逆流現象ならびに觀潮の習俗が存在していたことを述べる（明・殷聘尹『外岡志』巻 1「水利」、巻 2「遊賞」による）。また、鍾毓龍『說杭州』（浙江人民出版社、1983）第四章説水に「凡江口作三角形，而無洲渚互其中者，皆能起怒濤。即以浙江省論，温州飛雲江之潮，不啻于錢塘江。以其江流較短，而地又僻，人未注意及之耳。長江当秦漢時，崇明島未涌見，口門甚闊，潮勢直達洞庭。其後乃僅及孤山。今之潮漲猶達金、焦。枚乗作七発時，広陵濤の汹涌，当然之事，不必錢塘江也」の記述がある。崇明島は長江の河口にある中国第三の沖積島で、唐代に出現したとされる。
- 26 『笠翁伝奇十種』所収。なお『比目魚伝奇』も問題の埠の名を記さない。
- 27 「『醒世恒言』における馮夢龍の創作（I）—言語的特徴からのアプローチ」（『神戸外大論叢』39-6、1988. 11）と『《警世通言》における馮夢龍の創作—言語的特徴からのアプローチ—』（『神戸外大論叢』43-2、1992. 9）による。
- 28 「『古今小説』における馮夢龍の創作（I）—言語的特徴からのアプローチ」（『東方学』72、1986. 7）による。
- 29 「三言」が当初『古今小説』の名称で刊行されたこと、李漁がその作品集に『無声戯小説』と命名したことに鑑みるなら、これらの作品は小説と呼ぶべきであって、擬話本と呼ぶべきではあるまい。
- 30 「丁耀亢をめぐる小説と戯曲—明末清初における文学の役割について—」（『埼玉大学紀要教養学部』27、1992. 3）。